



TITLE:

# Inter-organizational Network Effects across Organizational Field Boundaries( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

Balazs, Fazekas

---

CITATION:

Balazs, Fazekas. Inter-organizational Network Effects across Organizational Field Boundaries. 京都大学, 2021, 博士(経済学)

ISSUE DATE:

2021-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22953>

RIGHT:

許諾条件により要旨は2021-04-01に公開

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (経済学)	氏名	Fazekas, Balazs
論文題目	Inter-organizational Network Effects across Organizational Field Boundaries (組織フィールドの境界を越えた組織間ネットワークの効果)		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>近年、ナノテクノロジーなどのハイテクノロジー分野において、ナノ素材などの新興技術の研究開発は、異なる産業や技術分野の複合領域として発展している。そこでは異なる分野間での共同研究開発に関わる産学官の組織間ネットワークが国際的に展開する。本論文は、異なる産業、技術分野、国の間での組織間ネットワークのイノベーションへの効果について、組織ネットワーク論を組織フィールド理論の観点から発展させた分析枠組で経営学的に分析する。従来の議論では、組織間での研究開発提携ネットワークにおける凝集的結合 (Cohesive Cluster) や構造的空隙 (Structural Hole) という構造形態の形成は知識移転やイノベーションを促進する効果を持つとされる。だが、本論文は、そうした効果が提携に関わる組織の属する産業や技術、国などの異なる組織フィールドの影響を受けることを理論的に検討する。組織フィールドとは、Martin(2003)等が発展させた理論的概念である。それは交流する複数の組織の間での複雑な相互作用関係が展開する社会構造体であり、問題共有や協働、競争が行われる。その内実には、相互作用のネットワークだけではなく、独自の文化、共有意味、認知枠組、制度的ロジック、役割構造、資源、権力などの諸要素から構成される。個々の組織フィールドは、保有する要素の違いにより、分化し、他のフィールドとの間に組織フィールド境界を形成する。異なる組織フィールドに属する組織同士は、同じネットワークにいたとしても、フィールドの内実の違いや境界の働きにより、それらの間の相互作用が異なってくる。従来の議論では、急進的なイノベーションにおいて、組織が凝集的結合のネットワークに位置する場合には、成果を上げやすく、構造的空隙の位置にある場合は成果が高いとされる。本論文は、組織が、異質な組織間フィールドの間のネットワークにおいて構造的空隙に位置する場合は、同質的なネットワークに位置する場合 (凝集的結合等) よりも、活用する情報や資源がより多様なために高い成果を上げやすいと理論的に考察する。そして、この分析枠組に基づき、日本企業を中心として、ナノテクノロジー、バイオテクノロジー、燃料電池などの新興技術領域における組織間での研究開発ネットワークを対象にして、特許データを用いながら構造的空隙や凝集的結合との位置にいる組織について、特許を中心にイノベーションの成果を実証的に検討した。</p> <p>本論文は、理論的分析と実証的分析の二つの部分から成る。第1部では、第1章で本論文の理論的課題を提示し、第2章では組織フィールド理論の発展を検証し、組織間ネットワークとの関連を示す。そして、第3章、第4章において、フィールドが保有する組織の資本や資源、制度化、文化、パワー、制度的ロジック、解釈枠組等と社会ネットワークなどの理論的関係を考察する。そして、第5章では、組織フィールドとその境界が、組織間ネットワークにおける情報や資源の流れ、そのフィルタリングやネットワーク変動に対して影響することを通じて、組織間の相互作用の展開や、凝集的結合や構造的空隙の関係に位置する組織の成果に影響することを示す。</p> <p>第2部では、こうした分析枠組の有効性について、共同特許の組織間ネットワークを対象にしてイノベーションの傾向を実証的に検討する。第7章では、まず日本のナノテクノロジーにおける異業種提携の経験の有用性、バイオテクノロジーにおける提携の国際化の有用性について検証し、異質な組織間フィールドの間にいる組織の持つ特許面での成果が高い傾向を示した。次に、バイオテクノロジー領域でのM&amp;Aを使ったフィールド境界を変えようとする動きや、燃料電池分野でのトヨタ自動車のネットワーク上でのポジショニングの傾向を分析した。最後にその結論を総括する。</p>			

(続紙 2 )

(論文審査の結果の要旨)

現代のハイテクノロジー分野において、ナノテクノロジーなどの新興技術は、複合領域として発展しており、国際的に異なる産業、技術の分野の企業、研究機関、政府機関などの組織が共同研究開発を行う場合が多くみられる。そのために、経営学では、様々な領域を横断して産官学が連携するオープン・イノベーションが起りやすい事業生態系（ビジネスエコシステム）のあり方への研究関心が高まっている。だが、他方で、多くの実例が示すように、異業種・異分野の横断連携的な組織間ネットワークは、常に高い研究開発成果を上げるわけではなく、技術、産業、国や地域の違いがそこでの協働関係に大きく影響することは学術的にも注目されてきた。本論文は、研究開発分野における組織間の提携ネットワークに注目して、マクロ組織論で発達してきた組織フィールドとその境界の視点を取り込み、これらが共同研究に独自の影響を与えることを理論的に考察した。加えて、BioscanやOrbisなどの国際的な特許や研究開発提携のデータベースを用いながら、代表的なナノテクノロジー、バイオテクノロジー、燃料電池などの分野での、産官学の共同特許ネットワークの展開とその特許成果への影響について実証的に検討している。

本論文の貢献は、大きく3つある。第一は、組織フィールド理論の理論的な研究成果を取り込み、異なる組織フィールドに属する組織間の提携関係には、それぞれのフィールドが有する経営資源や認知枠組、文化や技術、パワーや役割のありかたなどの相違が影響するという新たな理論的視点を導入したことである。第二は、構造的空隙などの従来の社会ネットワーク理論における定説的な構造効果仮説に対して、フィールドの影響を組み込んだ独自の効果仮説を設定し、検証したことである。従来は、ある組織が、分断した他の組織を結合する構造的空隙の位置にいた場合には、比較的高い成果を上げやすいとする。だが、本論文は、異質な分野や領域を結合する場合の方が、より高い成果を上げやすいことを、国際的な特許や提携のデータを使いながら示した。第三は、ナノテクノロジー、バイオテクノロジー、燃料電池などの代表的な新興技術の複合的研究開発領域を対象にして、日本企業中心とはいえ、国際的なデータを用いてその理論的な仮説の実証的検討を行い、自らの分析枠組の有効性を一定程度確認したことである。

だが、本論文も3つの課題を抱えている。第一に、組織フィールドとネットワークの間の相互作用を論じているにもかかわらず、フィールドからネットワークの影響に焦点を当てたために、ネットワークやそこでの行為主体がフィールドに影響するメカニズムの考察が不十分である。第二に、組織の研究開発活動に関する理論的な考察が十分ではないために、異なる組織フィールド間に属する組織が、共同研究開発ネットワークにおいて成果を上げる場合において保有する知識や能力の違いがどう影響するかがあまり明確でない。このため、実証分析においても内生性問題を十分排除できていない。第三に、異分野間での共同研究に関する組織間ネットワークの構造分析を行っているのであるが、組織が、どのような構造形態を構築し、構造的な位置取りを行うのが最適となるかについての議論が不明瞭である。

しかし、こうした課題も、筆者の関連する領域が抱える学術的な課題であり、今後の筆者の研究の発展によって解明が進むと思われる。よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。また、2021年2月4日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日：2021年 4月 1日以降